

令和5年度 飛驒市美術館企画展

姉小路氏城館跡と

飛驒の中世

展示品図録

飛驒市・飛驒市教育委員会



飛驒国は山間地域ながら畿内と適度な距離にあり、中世後期には朝廷・室町幕府の影響を受けながら独自の文化圏を形成していました。国内に姉小路氏・江馬氏といった小領主が並立し、それぞれの所領を治めていました。戦国時代、飛驒国は上杉・武田・織田といった列強の戦国大名に囲まれながら緩衝地帯・狭間の地域として注目され、やがて豊臣・徳川という統一政権に組み込まれました。

そのような飛驒地域の歴史の変遷を示す遺跡として、姉小路氏城館跡があります。この飛驒古川一带は「飛驒国司」と称された公家の姉小路氏が治め、多くの城が築かれた地域でした。姉小路氏城館跡は、古川盆地に所在する古川城跡・小島城跡・野口城跡・向小島城跡・小鷹利城跡の総称です。いずれも姉小路氏が築いた城として、古くから守り伝えられてきました。飛驒市では、平成二十九年以降、この五ヶ所を対象に文献史料調査・測量調査・発掘調査・歴史地理調査といった各種調査を行い、令和四年十一月に調査報告書を刊行しました。調査の結果、姉小路氏が築いた山城を三木氏・金森氏が改修しながら再利用し、やがて現在のまちの形に変遷していくあり方が明らかになってきました。

本展では、姉小路氏城館跡を取り巻く、激動の中世の飛驒の様子を紹介します。第一章では、姉小路氏城館跡で実施した調査の過程や明らかとなった成果を余すところなく紹介します。第二章では、姉小路氏城館跡の調査で出土した遺物とともに、飛驒地域の遺跡出土の考古資料から武将の暮らしぶりを概観します。第三章では、香川元太郎氏が描いた城郭イラストのうち、飛驒・美濃地域の原画を一挙に紹介します。第四章では、姉小路氏・江馬氏・三木氏・金森氏といった飛驒の武将にゆかりの遺品や、飛驒の中世から近世に至る歴史を理解する上で重要な資料を紹介いたします。数々の資料から、激動の飛驒を生きた武将たちに思いを馳せていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展にご協力いただいた諸機関および関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

飛驒市教育委員会 教育長 沖畑康子

例言

本書は飛驒市美術館において開催される令和五年度企画展「姉小路氏城館跡と飛驒の中世」(会期：令和五年十月二十一日～十二月十七日)の展示図録である。
 ・本書は「第二章発掘された飛驒の中世」「第四章姉小路氏と中世飛驒の至宝」の展示品について掲載・紹介するものである。
 ・本展の企画、写真撮影、作品解説、図録作成は飛驒市教育委員会学芸員が担当した。執筆等の分担は以下の通りである。

第一章Ⅱ大下永、三好清超、石川路

第二章Ⅱ三好清超

第三章Ⅱ大下永

第四章Ⅱ大下永、三好清超

図録編集Ⅱ大下永

・解説の時代・世紀は推定を含む。
 ・出陳作品の一部は会期中展示替えを行う。

目次

ごあいさつ …… 2

第二章発掘された飛驒の中世 …… 3

第四章 姉小路氏と中世飛驒の至宝 …… 10

姉小路氏と至宝 …… 10 江馬氏と至宝 …… 14 三木氏と至宝 …… 16

金森氏と至宝 …… 18 金森氏のまちづくり …… 20

中世飛驒の宗教勢力と至宝 …… 22

史料積文 …… 26

主要参考文献・出展目録 …… 27

謝辞

本展の開催にあたり、所有者をはじめ、多くの方々のご指導・ご協力を賜りました。ここにご芳名を記して感謝いたします。(敬称略・五十音順)

〈団体・機関〉 安国寺、恵那市教育委員会、大垣市教育委員会、可児市、岐阜県、

下呂市教育委員会、寿楽寺(株)新泉社、瑞岸寺、誓願寺、千光寺、素玄寺、

高山市教育委員会、富加町教育委員会、飛驒・世界生活文化センター、本光寺、林昌寺

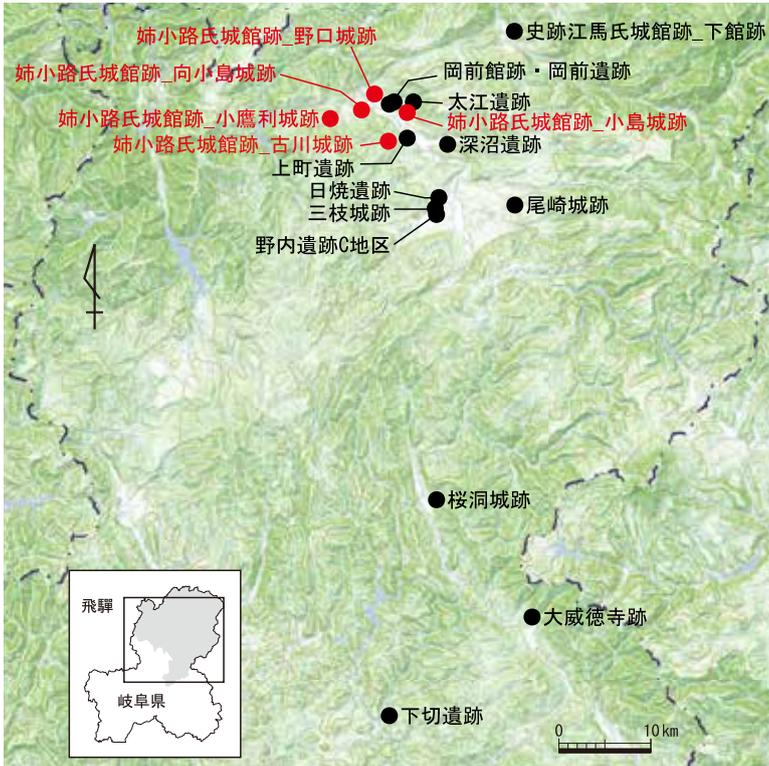
〈個人〉 香川元太郎、蒲敦子、蒲茂太郎、杉下豊、渡邊久憲

第二章 発掘された飛驒の中世

姉小路氏城館跡の発掘調査では、主に十五世紀後半から十六世紀末までの出土遺物が見つかりました。その内容は、酒器の土師器皿、茶器の瀬戸美濃焼天目茶碗などの国産陶器や、座敷を飾ったと考えられる青磁や白磁など中国産の陶磁器です。

飛驒地域の他の山城や平地の遺跡でも同様の遺物が出土しています。このため、十六世紀前半には山城と平地の遺跡に、座敷で飾られた空間で酒や茶をたしなんでいた可能性が想定されました。一方、三枝城跡では敵に投げつける飛礮なども出土しました。飛驒の山城は、十六世紀後半には戦に向けた場へと変わっていったのでしょうか。

このように、姉小路氏城館跡をはじめとした飛驒の山城の発掘調査成果は、時代ごとに異なる山城の性格に迫る可能性を秘めています。



遺跡位置図 (国土地理院標準地図・陰影起伏図を基に作成)



1～5 姉小路氏城館跡 出土品 飛驒市蔵

姉小路氏城館跡は、飛驒市古川町に所在する古川城跡・小島城跡・野口城跡・向小島城跡・小鷹利城跡の総称です。姉小路氏によって築かれ、後の三木氏・金森氏など各時代の武将によって手が加えられました。2019～2021年度の発掘調査では、古川城跡で95点・小島城跡で37点・野口城跡で190点・向小島城跡で14点・小鷹利城跡で67点、合計403点の遺物が出土しました。用途に目を向けると、宴会や儀礼の場の酒器とされる土師器皿が265点と最も多く、また茶道具である瀬戸美濃焼の天目茶碗も見られます。戦いの場として築かれた山城にも、酒や茶をたしなむ空間が存在した可能性が想定されます。



6 岡前館跡 出土品 飛驒市蔵

飛驒市古川町杉崎に所在し、姉小路氏の居館跡と伝わる遺跡です。土師器皿、瀬戸美濃焼の天目茶碗、^{がき}瓦器の火鉢などが採集されました。発掘調査が行われていないため遺物の点数は少ないものの、酒器の土師器皿、茶器の天目茶碗、暖をとる火鉢の存在は中世の館の存在を示唆します。なお、ここで火鉢とした瓦器は、茶道具の風炉^{ふうろ}の可能性もあります。



7 岡前遺跡 出土品 岐阜県文化財保護センター蔵

岡前館跡に隣接する遺跡です。土師器皿、瀬戸美濃焼天目茶碗、^{すずやき}珠洲焼すり鉢などが出土しました。土師器皿は酒器、天目茶碗は茶器、すり鉢は調理具です。岡前館跡・岡前遺跡の出土品は江馬氏城館跡下館跡の様相と似ています。会所のような座敷を持つ施設が存在した可能性があります。



8 ^{かんまち} 上町遺跡 出土品 飛驒市蔵

古川城跡の麓に位置する遺跡です。これまでの調査で土師器皿、瀬戸美濃焼天目茶碗・入子・すり鉢などが出土しました。山城の麓の遺跡で酒器の土師器皿や茶器の天目茶碗が出土する様子は、江馬氏城館跡の様子に似ています。



9 ^{たいえ} 太江遺跡 出土品 岐阜県文化財保護センター蔵

小島城跡の北麓に位置する遺跡です。土師器皿が出土しました。小島城跡の麓の太江遺跡に、土師器皿で酒をたしなむ空間があった可能性を示す資料です。



10 ^{ますしまじょうあと} 増島城跡 出土品 飛驒市蔵

金森氏の入国後に飛驒古川以北を統治するために築いたとされます。瀬戸美濃焼の天目茶碗が出土しました。金森氏は茶の湯の名人としても知られ、茶器として使用されたものと考えられます。同じ年代の天目茶碗が古川城跡でも出土しました。古川城跡と増島城跡とが、間を空けずにうつり替わったことを示す資料でもあります。



11 江馬氏城館跡 出土品 飛驒市蔵

江馬氏城館跡は北飛驒の国人領主・江馬氏の拠点です。下館跡を中心に、本城の高原諏訪城跡ほか複数の山城跡で構成されています。1973年以降の発掘調査で5,616点の遺物が報告されています。最も多いのは土師器皿で3,022点あり、全体の半分以上を占めています。土師器皿は、客人をもてなす宴会や儀礼の場などで用いられた酒器とされます。また、煤が付いているものは、灯明皿等に再利用されたものと考えられます。大量に土師器皿を消費する空間が、江馬氏の下館跡には備わっていたと考えられます。



12 ^{おぎさきじょうあと} 尾崎城跡 出土品 高山市指定有形文化財 高山市教育委員会蔵

尾崎城跡は高山市丹生川町町方に所在し、高山盆地から信濃へぬける主要街道沿いに位置する山城です。発掘調査によって土師器皿が出土しました。また、青磁や白磁など多くの貿易陶磁が出土したことで知られています。大量の貿易陶磁で飾られた座敷などで、土師器皿を用いて酒をたしなんだのかもしれない。



13 ^{みえだじょうあと} 三枝城跡 出土品 岐阜県文化財保護センター蔵

高山市上切町に所在する山城で、高山盆地から古川国府盆地へ抜ける街道沿いに位置します。土師器皿、瀬戸美濃焼皿・卸目付大皿、飛礫が出土しました。土師器皿や瀬戸美濃焼が宴会や儀礼の場があったことを示す一方、飛礫の存在は戦場の場としての山城の一面を示します。飛礫の山城において、戦に関わる数少ない遺物です。



14 ^{ひやけ} 日焼遺跡 出土品

岐阜県文化財保護センター蔵

三枝城跡の麓に位置し、野内遺跡 C 地区に隣接する遺跡です。瀬戸美濃焼天目茶碗・卸目付大皿が出土しました。天目茶碗は茶器、卸目付大皿は調理具としての使用が想定されます。



15 ^{のうち} 野内遺跡C地区 出土品

岐阜県文化財保護センター蔵

三枝城跡の麓に位置し、日焼遺跡に隣接する遺跡です。土師器皿、瀬戸美濃焼水注、柄付片口、卸目付大皿が出土しました。土師器皿は酒器、水注は茶器、柄付片口・卸目付大皿は調理具としての使用が想定されます。



16 さくらぼらじょうあと 桜洞城跡 出土品 下呂市教育委員会蔵

下呂市萩原町に所在し、三木氏の居館跡とされる遺跡です。館を取り囲む堀跡から土師器皿、瀬戸美濃焼の天目茶碗や皿が出土しました。16世紀前半の時期のもので、館の存続期間を示すものです。土師器皿は宴会や儀礼の場での酒器として、瀬戸美濃焼の皿は飲食用として、天目茶碗は茶器として使用されたと想定されます。



16 桜洞城跡 出土品 下呂市教育委員会蔵

桜洞城跡の館内からは、土師器皿、瀬戸美濃焼皿、青磁の酒会壺・盤・香炉、白磁杯、青花の染付皿が出土しました。青磁・白磁は中国からの舶来品で当時貴重なものでした。中世の絵画資料には、盤や香炉が座敷に飾られた様子が描かれています。三木氏も青磁や白磁で飾られた座敷で、土師器皿を用いて酒をたしなんだのかもしれませんが。



17 ^{しもぎり}下切遺跡 出土品 岐阜県文化財保護センター蔵

下呂市金山町に所在する遺跡で、飛騨川右岸の河岸段丘上に位置します。縄文時代から近世までの遺構が重なる遺跡です。中世の遺物としては、土師器皿、瀬戸美濃焼の天目茶碗、山茶碗が出土しました。

第四章 姉小路氏と中世飛驒の至宝

姉小路氏と至宝

姉小路氏は公家の一族で、藤原師尹もろただを祖とする藤原北家小一条流の支流にあたります。「飛驒国司」と称された藤原家綱いえつなが飛驒に所領を得て拠点を築いたと考えられます。家綱の家系は、十五世紀初めごろに古川・小島・向世の郷に引き継がれたと考えられます。戦国の動乱の中で姉小路氏は衰退し、やがて姿を消しました。

その後、江戸時代後期に国学者・田中大秀おおひでの顕彰により、肖像画制作の他、遺蹟・遺墨の収集が行われた結果、現在の古川町内には多数の姉小路氏関連の文化財が残ります。本展ではそれらを一挙に紹介します。



2 姉小路濟継画像（左）・1 姉小路基綱画像（右）

飛驒指定有形文化財

絹本著色 江戸後期 個人蔵

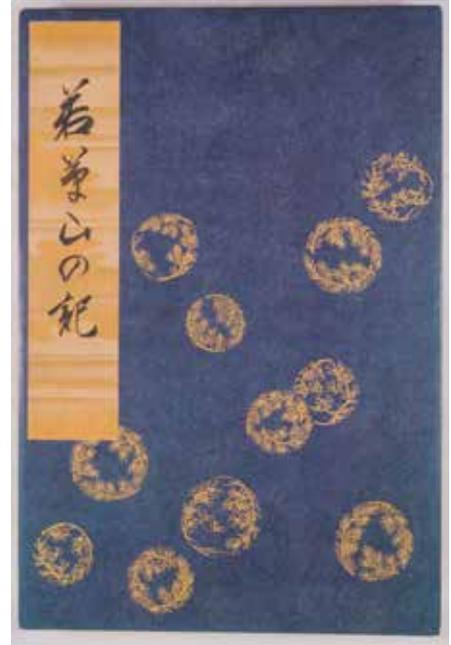
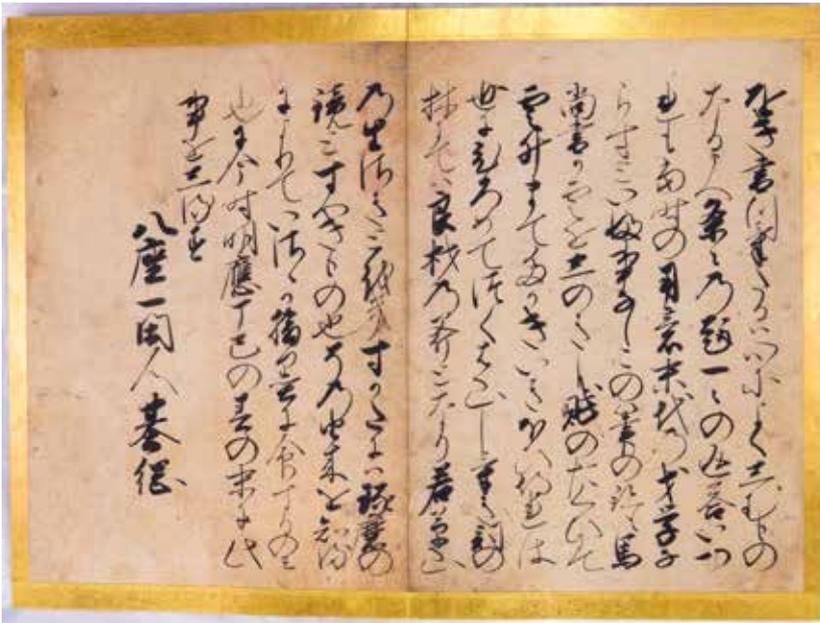
姉小路基綱（1441～1504）とその子・姉小路濟継（1470～1518）の画像です。江戸時代後期に田中大秀としまつさだが土佐光貞かばやそむらに依頼して描かせ、高弟・蒲八十村あさざいろう さしぬきが譲り受けたものと伝わります。基綱像と濟継像は、二幅一対のもので、同時に制作されたものです。基綱像は右向きに座り、縹色の直衣、浅葱色の指貫さしぬきを着た公家姿で描かれています。濟継像は左向きに座り、黒色の冠に黒色の袍、赤地の据をつけ、白の表袴うえのはかまに笏しやくを持ちます。濟継像は正式な文官の装いであることが特徴です。



3 極書

紙本墨書 江戸後期 個人蔵

姉小路基綱・濟継の画像に附された鑑定書です。賛人が公卿で能書家の花山院愛徳かざんいんよしのり、画人が土佐光貞であること、さらに御影の2名の人物（基綱・濟継）の来歴が記されています。末には寛政11年（1799）、田中大秀の署名があり、画像の来歴を証明しています。基綱・濟継画像の制作と、ゆかりの地域への提供という流れは、江戸時代後期の大秀らによる顕彰活動の一端と言えます。

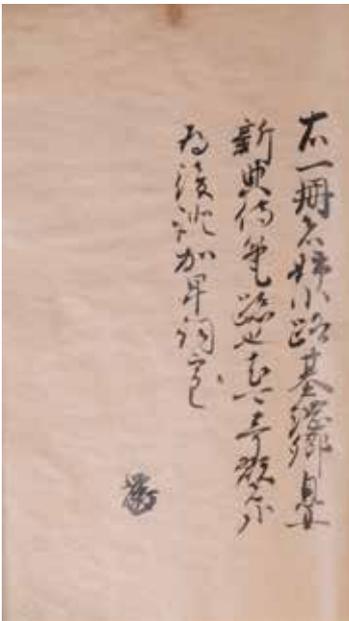


4 若草山の記

飛騨市指定有形文化財

紙本墨書 明応6年(1497) 個人蔵

『若草山』は室町時代後期の連歌師・猪苗代兼載いなわしろけんさいの作です。兼載が奈良某院の童子の問いに答える形で連歌の心得を説く内容です。奥書によると、この書は明応6年(1497)に姉小路基綱によって強いて借り出して写され、後土御門天皇の勸覧に供されたものです。巻末には文政13年(1830)、田中大秀が筆を加えています。大秀の書が共に装丁されていることから、現在伝わる豪華な表装は江戸後期に整えられたものと考えられます。

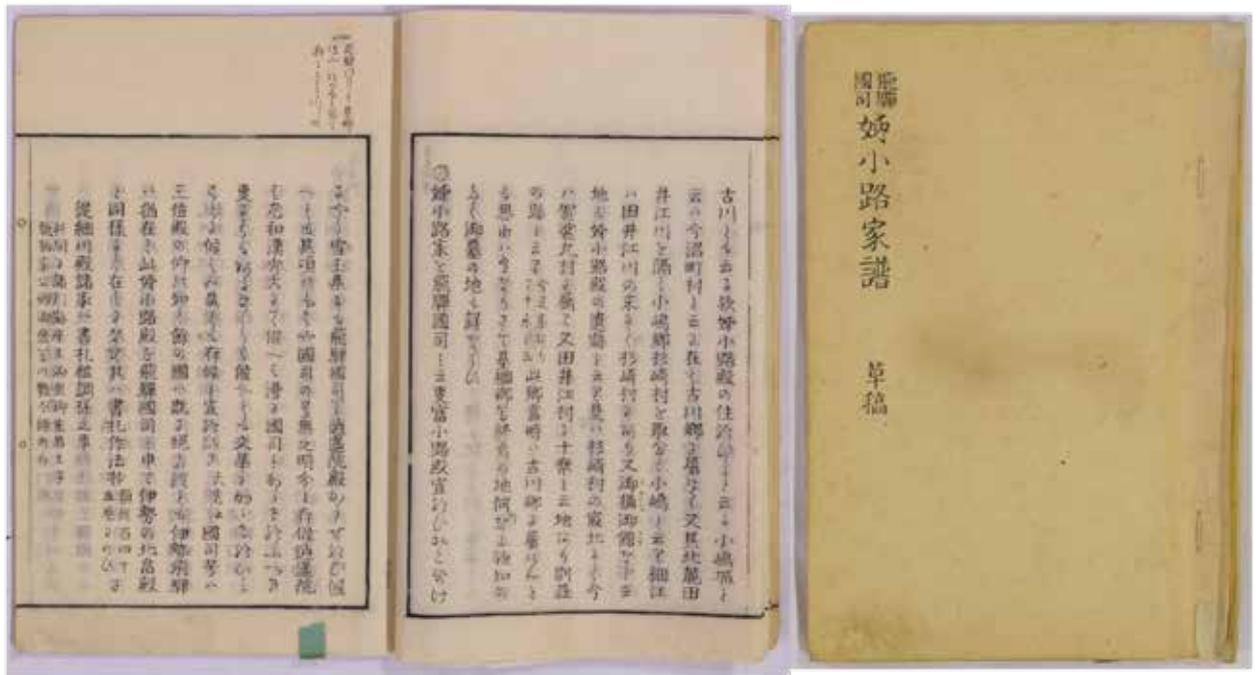


5 後撰集

飛騨市指定有形文化財

紙本墨書 16世紀初め頃 個人蔵

姉小路基綱の息女・済子なりこによる後撰和歌集の写本です。済子は宮中で奏請そうせい(天皇に許可を得ること)や伝宣でんせん(勅旨を伝達すること)を司る宮内卿典侍に、姉小路家で唯一任じられた人物です。「健筆」と称され、書に優れた人物としても知られていました。天保4年(1833)に田中大秀の記した辞によると、この書は大秀が京都で入手したものを修復し、それが飛騨に伝わったことが分かります。

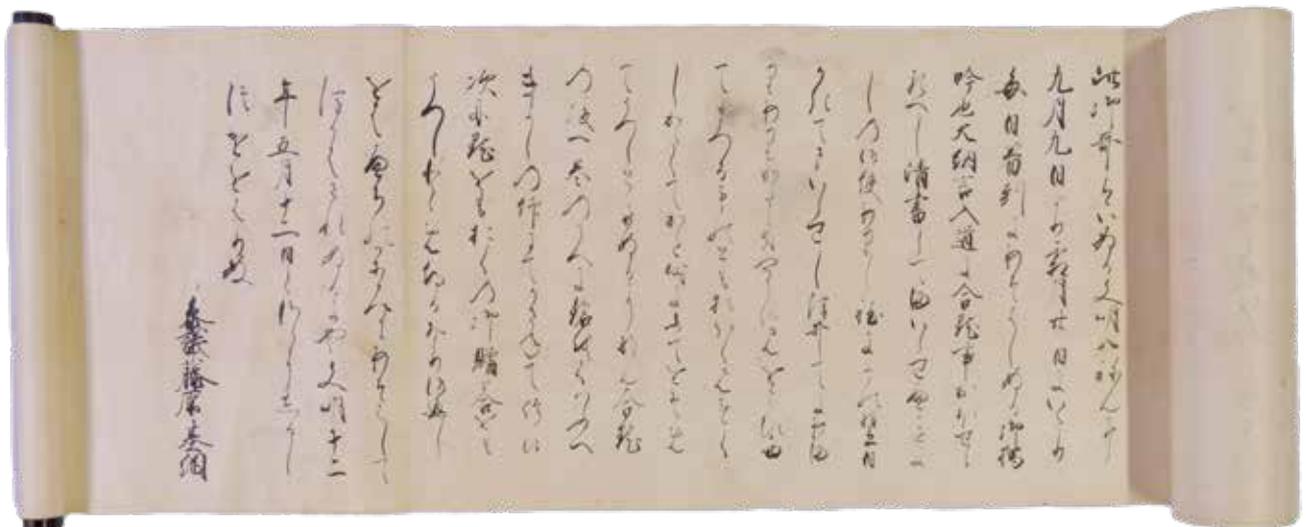


6 飛驒国司姉小路家譜

飛驒市指定有形文化財

紙本墨書 天保4年(1833)頃 個人蔵

田中大秀による草稿で、姉小路家歴代の系譜を丁寧に筆書しています。末に姉小路濟子写本の後撰集に関する記事と、天保4年(1833)4月の年号記載があり、大秀によって後撰集が収集されたほぼ同時期にこの家譜も作成されていることが分かります。姉小路氏関係の書跡・典籍の収集に合わせて、諸記録を参照して研究した大秀の足跡がうかがえます。

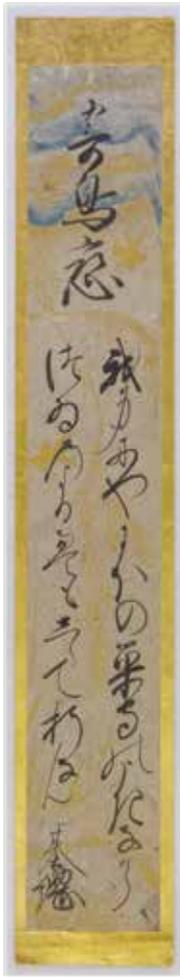


7 足利義政詠着到百首和歌

飛驒市指定有形文化財

紙本墨書 文明12年(1480) 個人蔵

将軍・足利義政が詠んだ和歌を姉小路基綱が清書したものです。文明8年(1476)9月9日から11月20日にかけて義政が独吟した百首を、歌道師範であつた飛鳥井雅親(1417~1490)が合点(評価)し、基綱がそれを清書して卷子仕立てとしたもので、文明12年(1480)に制作されました。飛鳥井雅親は基綱の和歌の師です。奥書に「あまりにありがたきように」とあるように、基綱は清書することについての光榮な心持を記しています。

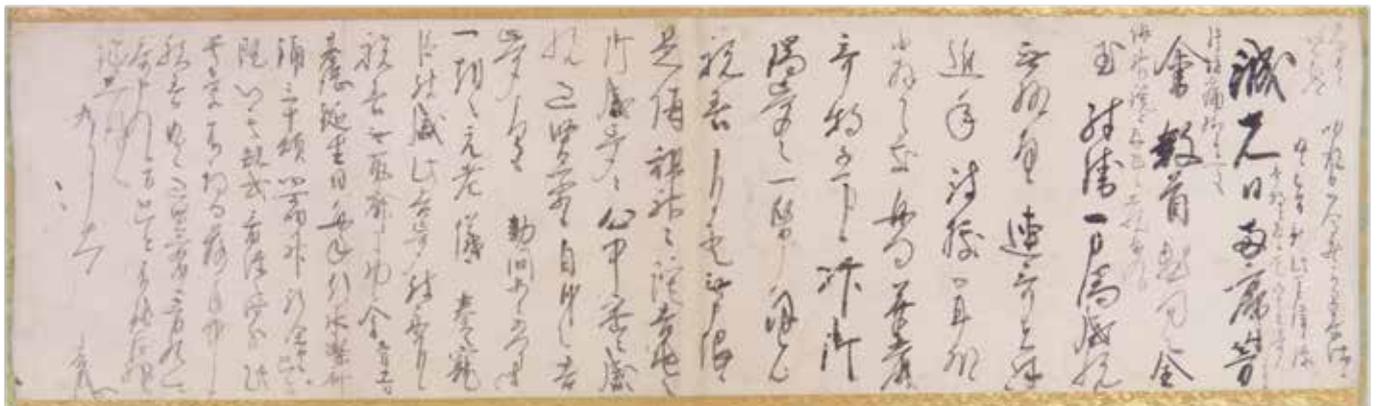


8 姉小路基綱和歌短冊（左）・9 濟継和歌短冊（右）

飛騨市指定有形文化財

紙本墨書 15世紀末～16世紀初め頃 個人蔵

姉小路基綱と濟継自筆の和歌短冊です。基綱の和歌は金泥の短冊で、濟継の短冊は軸装されて伝わっています。それぞれの来歴は不明ながら、基綱短冊の収納箱に田中大秀門下の中村善右エ門通平の書付があります。この資料からも、江戸後期に大秀やその門下生が姉小路氏関係の遺品を収集し、姉小路氏の知行地であった古川町内に伝えた様子が想像できます。



10 姉小路基綱^{しょうそく}消息

国認定重要美術品

紙本墨書 15世紀末頃 個人蔵

姉小路基綱が記した消息（手紙）です。差出年・宛所ともに不明ですが、内容から基綱が^{さんじょうにしきねたか}三条西実隆（1455～1537）に宛てた手紙と考えられます。先日の歌会で実隆が詠んだ歌に対して縁起が良いという感想を丁寧に述べています。姉小路基綱と三条西実隆は歌人として親交が深く、この手紙からも日常における歌人同士のやりとりがうかがえます。さらに、この手紙を差し出した9月11日は基綱の誕生日であることが記されています。基綱は毎年誕生日には行水潔斎の後に経文を読誦し、四所明神に祈念していたようです。基綱の誕生日が確認でき、その当日の習慣から基綱の信心深い人間性が垣間見えます。

江馬氏と至宝

北飛驒・高原郷を中心に勢力を伸ばした武士の一族が江馬氏です。現在の飛驒市神岡町周辺を本拠とし、一時期は越中まで勢力を拡大したと伝わります。戦国時代に入ると姉小路氏と争い、姉小路氏が衰退すると、上杉氏・武田氏・織田氏といった対外勢力と交渉しつつ、国内では三木氏と争います。天正十年（一五八二）、八日町の戦いで江馬輝盛が討死し、その後江馬氏は衰退します。

本展では、江馬氏の居館跡で出土した重要な遺物の他、菩提寺・領域内に伝わる中世の宝物を出陳します。



11 墨書土師器皿

飛驒市指定有形文化財

江馬氏下館跡出土 16世紀前半 飛驒市蔵

江馬氏の下館跡で出土した墨書の土師器皿（かわらけ）です。京都産土師器皿を模倣した製品で型式編年との対比から、16世紀前半頃に作成されたと考えられます。文字は方角・色・龍といった要素を組み合わせ、放射状に書かれています。館の西端と南端からそれぞれ2枚1組で見つかり、館造営の際に地鎮のために埋められたと想定されます。



裏面



表面

12 懸仏

岐阜県指定重要文化財

木製・小萱薬師堂所在 永仁7年（1299） 瑞岸寺蔵

懸仏は「御正体」とも呼ばれ、仏の姿を映した盤を壁や柱に釣り、礼拝したものです。この懸仏は、飛驒市神岡町小萱の薬師堂に伝わるものです。表面に線彫りの円輪を配置し、その中に仏の名を刻んでいます。銘文によると永仁7年（1299）、左兵衛尉藤原国家という人物が旦那となり、勸進僧・覚祐が制作を担ったことが分かります。各人物の詳細は不明ですが、この地域の有力者と想定されます。



13 鑿鉢

岐阜県指定重要文化財

銅製 文禄3年(1594) 瑞岸寺蔵

鑿鉢とは、寺院などで読経の際に打ち鳴らす鉢型の道具です。口縁部上面には陰刻銘があり、それによると文禄3年(1594)、京都三条の金工・金龍子によって制作されたことが分かります。瑞岸寺は飛騨市神岡町殿に所在する臨済宗の寺院です。下館と同じ江馬氏本拠の集落内に位置し、江馬氏の菩提寺であったと伝わります。



14 金龍子覚 瑞岸寺宛

紙本墨書 文禄4年(1595) 瑞岸寺蔵

鑿鉢とともに瑞岸寺に保管されている購入時の領収書です。内容は唐様の鑿鉢を購入したこと、抱木(うちならし)と藤輪も購入し、上辺の文字彫りについても同時に注文したことが分かります。抱木・藤輪ともに現在も伝わります。文書にある「未」年は文禄4年(1595)であり、代金の支払いは完成の翌年であったことが分かります。



15 三木自綱書状 塩屋筑前守宛

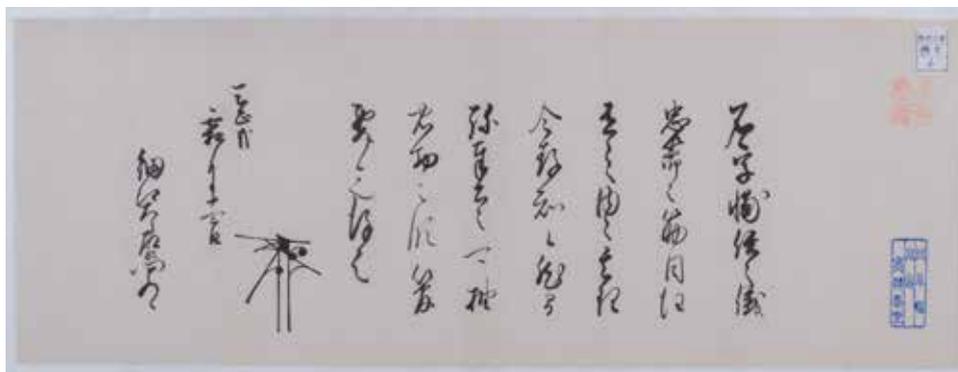
紙本墨書 永禄~天正年間 (16世紀後半) 飛騨高山まちの博物館蔵

三木自綱から塩屋筑前守秋貞に宛てた書状です。塩屋秋貞は小八賀郷（現在の高山市丹生川町）に所在した尾崎城の城主であったと伝わる武将です。書状の内容は借錢に関するもので、河端という人物から借錢 100 疋が塩屋秋貞に届いたことを了解し、返済の約束を確認する内容となっています。詳細は不明ですが、塩屋秋貞が三木自綱の意を受けて借錢のやりとりを行っていた様子がうかがえます。

三木氏と至宝

三木氏は南飛騨を本拠とする武将でした。十六世紀になると高山・古川盆地に進出し、姉小路氏の衰退と前後して古川盆地を掌握します。天正十年（一五八二）、八日町の戦いでは江馬氏を破りますが、天正十三年（一五八五）、金森氏の飛騨侵攻により滅亡します。

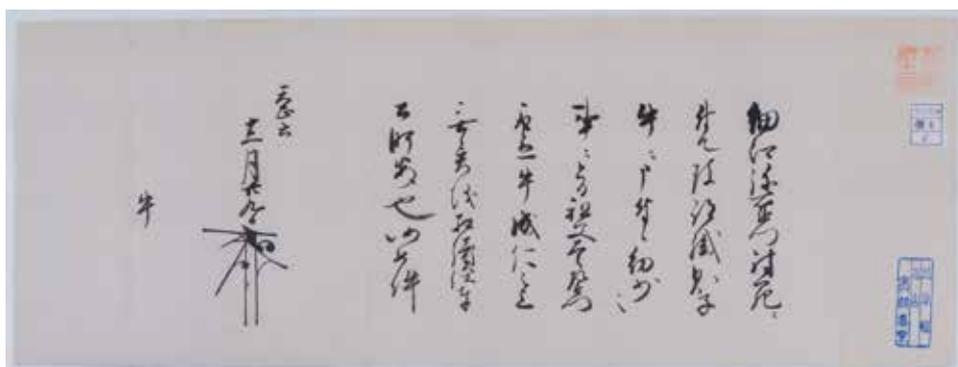
本展では、三木氏関連の至宝として、発給した文書に加え、祈願所であった千光寺（高山市丹生川町）に伝わる資料、傘下の武将・塩屋秋貞の居城とされる尾崎城の出土品を紹介します。



16 三木自綱書状写 細江太郎左衛門宛

紙本墨書 原本：天正2年 (1574) 飛騨高山まちの博物館蔵

益田郡小坂村（現在の下呂市小坂町）細江家に伝わった三木自綱書状の写しです。自綱から細江太郎左衛門に宛てた手紙で、細江の名字を名乗ることを認め、自綱に忠節を尽くすよう伝えています。この文書のように支配者が権利を認める文書は「安堵状」と呼ばれます。戦国時代は発給者が自らの署名や花押（サイン）を据える形式が広く見られ、この文書にも自綱の花押が据えられています。



17 三木自綱跡職安堵判物写 細江牛宛

紙本墨書 原本：天正6年 (1578) 飛騨高山まちの博物館蔵

天正2年の書状と同じく、この書状も細江家に伝わった文書の写しです。三木自綱から細江牛に宛てたもので、細江弥右衛門が討死したことによる相続を認めています。さらに、牛は幼いことから成人するまで祖父の太郎右衛門に継がせるように伝えています。この文書にも三木自綱の花押が据えられています。



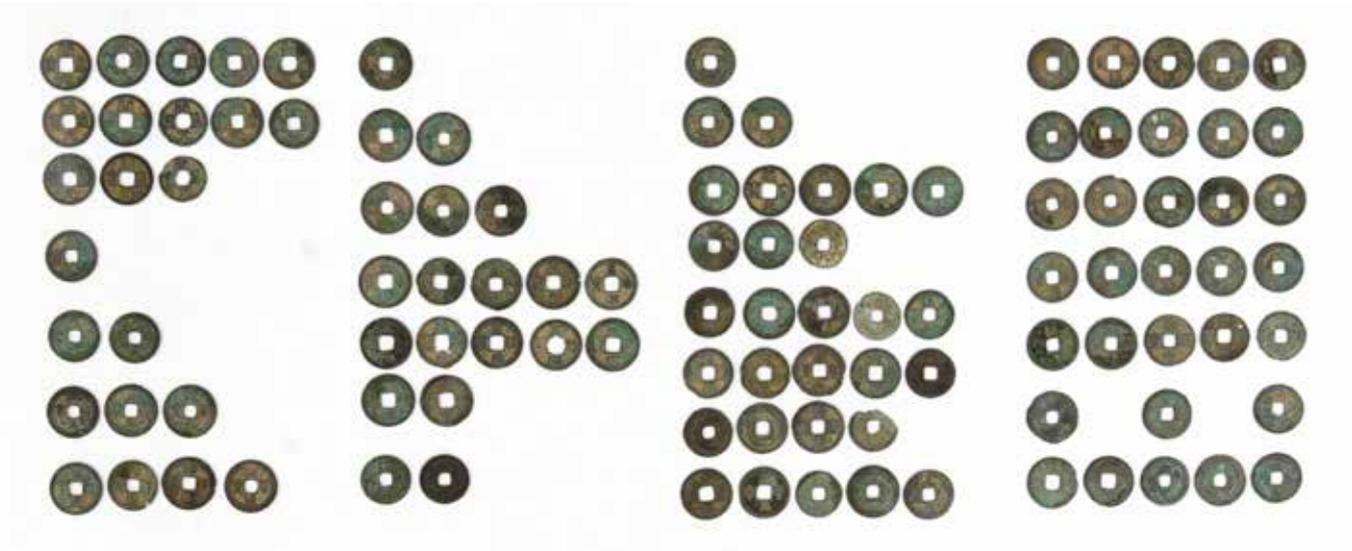
18 ^{なおより}三木直頼梵鐘銘 (拓本)

梵鐘銘
(千光寺蔵、岐阜県指定重要文化財)

原本：岐阜県指定重要文化財

原本：天文15年(1546) 千光寺蔵

千光寺所蔵の梵鐘銘の拓本です。天文15年(1546)、戦乱で伽藍が焼失した千光寺に対し三木直頼(三木自綱の祖父)が寄進したものです。この時期、姉小路氏3家は健在ですが、既に直頼が「国主」と自称していることは歴史的にも注目されます。永禄7年(1564)、甲斐武田軍の飛騨侵攻の際、千光寺を攻める武田軍に向けてこの鐘が転がり落ちていったと伝わります。千光寺が金森氏の庇護によって再興した後、この鐘は金森可重^{ありしげ}の所望によって高山城に召上げられます。元禄5年(1692)に飛騨が幕府直轄地になり、高山城の取り壊しが決まると、高山城の在番であった加賀藩に返却を願い出て許可され、鐘は再び千光寺に戻りました。



19 古銭

尾崎城跡出土 使用年代：15～16世紀 飛騨高山まちの博物館蔵

尾崎城跡は三木氏の家臣・塩屋秋貞の居城と伝わります。この古銭は明治39年(1906)、尾崎城跡で壺に入った状態で偶然発見されたものです。古銭は様々な種類が見られますが、多くは北宋という中国の王朝で製作され、輸入されたものと考えられます。多くの古銭が埋まっている状況は各地で見られ、貯蓄、天災等に備えた備蓄、まじないなど様々な理由が説かれています。

金森氏と至宝

金森長近は幼少より織田信長に仕え、後に戦功により越前大野郡の一部を与えられて大野城を築きます。その後、羽柴(後の豊臣)秀吉に仕え、天正十三年(一五八五)、命により飛驒に侵攻します。三木氏を駆逐し、飛驒国を拝領します。秀吉死後は徳川家康につき、「関ヶ原の戦い」では東軍に加わりました。長近の跡を継いだのが、長屋氏から養子に入った可重ありしげです。可重は飛驒攻め後に古川郷を与えられ、増島城を築きます。金森氏は、近世以降の飛驒の礎を築いた一族と言えます。本展では、長近・可重画像の他、古川町所在の可重ゆかりの寺院・林昌寺に伝わる金森家の遺品を紹介します。



20 金森長近画像

高山市指定有形文化財

絹本着色 江戸時代 素玄寺蔵

金森長近(1524～1608)の画像です。長近は織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕えた人物で、飛驒高山藩の藩祖となりました。画像は半僧半俗姿で、側面に梅鉢文様が描かれた畳の上に着座しています。左上には長近の法号「金龍院殿前兵部尚書法印要仲素玄大居士」が書き込まれます。この画像が伝わる素玄寺は高山城下にあり、長近の菩提寺として2代・可重が建立しました。画像は安政3年(1856)、高山の郷土史家・桐山力所が再新して素玄寺に寄進したものです。

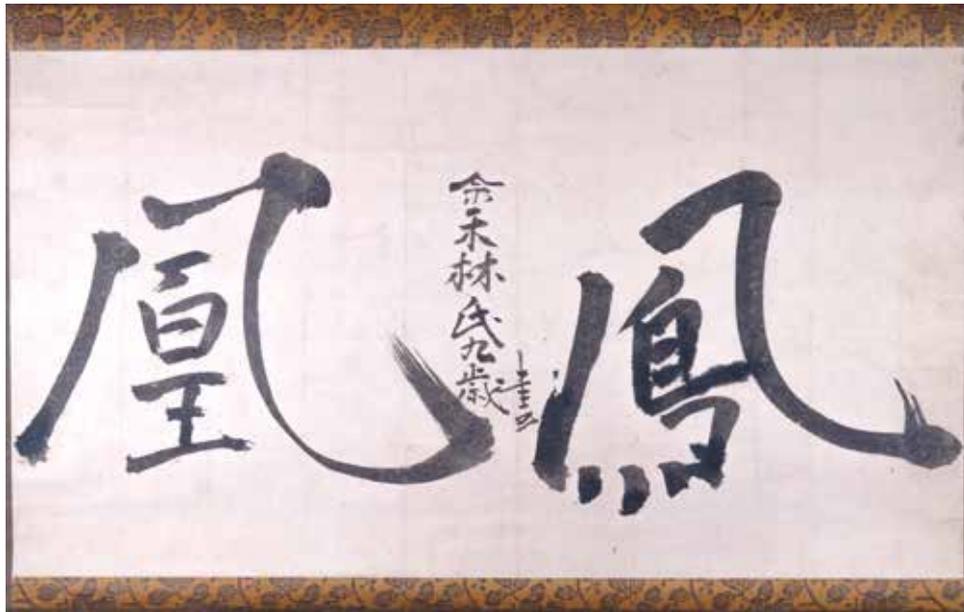


21 金森可重画像

岐阜県指定重要文化財

絹本着色 江戸時代 林昌寺蔵

飛驒高山藩2代・金森可重(1558～1615)の画像です。代表的な可重像の一つで、畳の上に平服であぐらをかいて座る姿をとらえた珍しい作例です。陣中であつてもお茶を嗜んだ、可重のひとりとなりうかがえます。この画像が伝わる林昌寺は増島城の東側に所在します。元々は姉小路氏の菩提寺であつたものを、可重が実父母の追善供養として増島城下に再興したとされ、山門は増島城の城門を移築したものと伝わります。

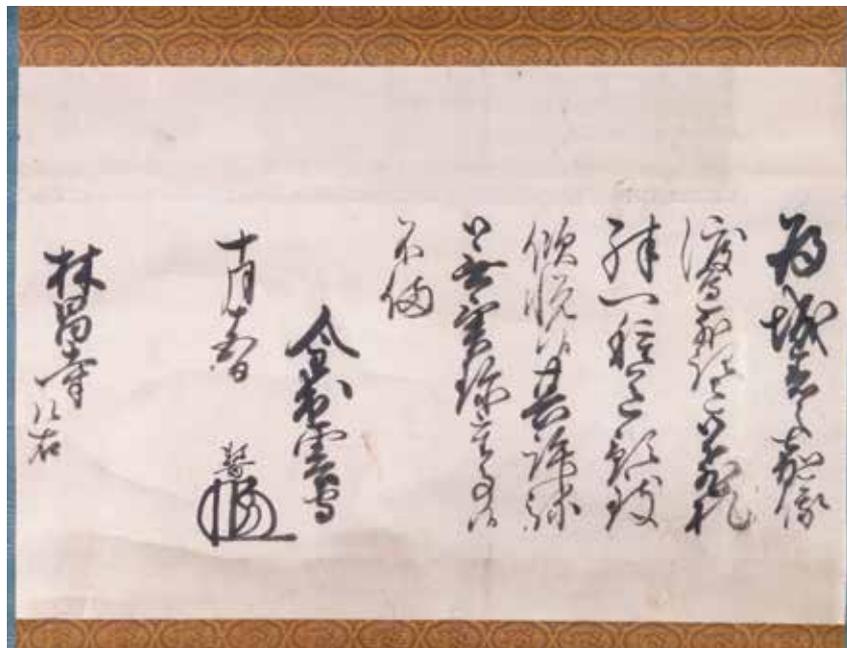


22 金森頼皆遺墨「九歳」

飛驒市指定有形文化財

紙本墨書 江戸時代 林昌寺蔵

高山藩6代藩主・金森頼峯（1669～1740）の書と伝わります。頼峯は父・頼業よりなりの死去により4歳で家督を継ぎます。後に將軍・徳川綱吉の側用人となりますが、元禄5年（1692）に出羽国上山へ移封となります。さらに元禄10年（1697）、美濃国郡上へと移封となりました。この書は、「鳳凰」と大きく書かれています。中央部に「金森氏九歳書」とありますが、この「九歳」の意味は不明です。



23 金森頼峯書状 林昌寺宛

飛驒市指定有形文化財

紙本墨書 江戸時代 林昌寺蔵

郡上藩主であった金森頼峯が参勤交代で国許に戻った折、林昌寺が祝いを贈ったことに対する礼状です。2行目に「渡辺外記」という人物の名が見え、この人物は高山藩以来の金森家の家老です。林昌寺は、直接藩主の頼峯に送ることをはばかって、家老の渡辺外記を通じて贈り物をしたと考えられます。郡上藩時代になっても、金森氏と林昌寺は贈答を行う繋がりを保っていたことが分かります。

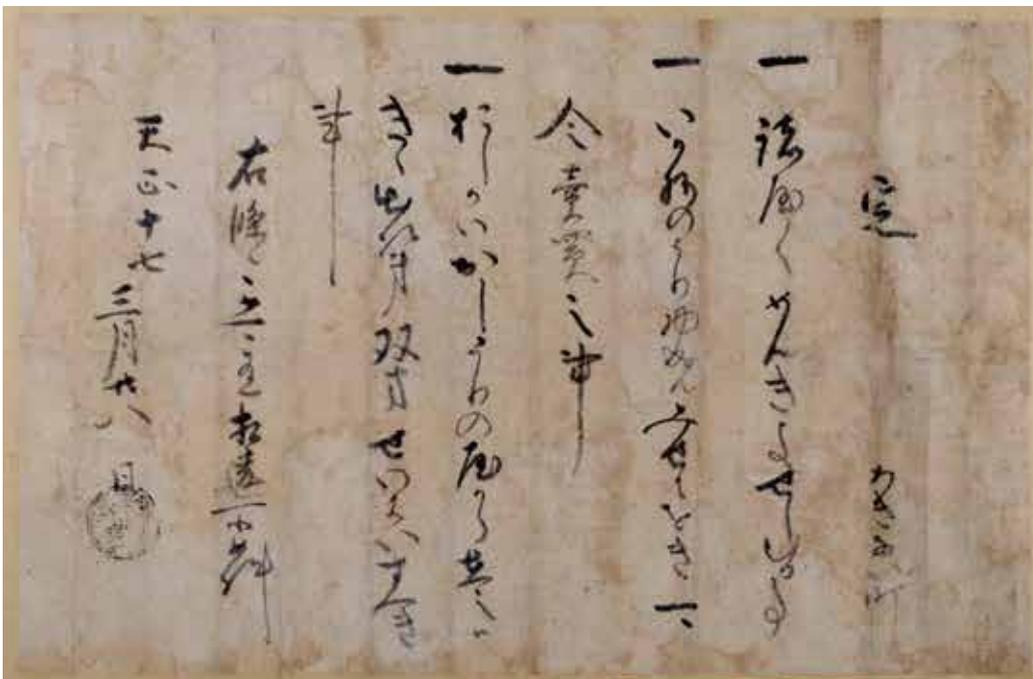


金森氏遺品 (24 葵紋付革履・25 梅鉢紋付扇・26 望遠鏡)

飛驒市指定有形文化財

江戸時代 林昌寺蔵

いずれも金森氏の遺品と伝わります。扇は4代・金森頼直よりなおの遺品と伝えられています。扇骨には、3代・重頼しげより以降の金森家の家紋である裏梅鉢紋うらうめぼちもんが象られています。履物は、牛馬の革でできたスリッパです。甲部分の外側には徳川家の家紋・葵紋あおいもんが描かれています。望遠鏡は、伝来など詳細は不明ですが「一閑張り」と呼ばれる、江戸時代の国産望遠鏡に多くみられる技法で作られたものです。



27 金森可重定書

紙本墨書 天正17年(1589) 飛驒市蔵

天正17年(1589)、古川の「あきない町」に交付された定書です。諸役(税)の免除、店売りの指示、押買・押売の禁止を定めています。金森可重が交付したと思われるが、黒印からは判読できません。増島城や城下町がいつ成立したか詳しくは分かっていませんが、この定書によって、天正17年段階には商いを行う町場が増島城下に存在していた事が分かります。

金森氏のまちづくり
 金森長近・可重が入国当初から進めたまちづくりによって、本拠の高山を中心に古川・萩原・神岡等の町場が各地に整備されました。これらは、地域の中心的町場として現在まで続いています。本展では、増島城下(現在の飛驒古川)に焦点を当て、城下町の形成に関わる史料・遺品を紹介します。



28 笈 (伝 快存上人遺品)

飛驒市指定有形文化財

木製 江戸時代 誓願寺蔵

笈とは、仏像・仏具・経本などを入れて僧侶が背負った箱のことです。この笈は古川にあった福全寺の開祖・快存（快尊・海尊とも）の遺品と伝わります。全体に金銅板が貼り付けてあり、装飾的な文様が細やかです。上段は双塔の三重塔から仏像が顔を出し、右側は金剛界大日如来が顕され、左右の扉には金剛力士像が確認できます。同型の笈の作例から、快存が生きた16世紀頃のものだと推定されます。



29 飛驒国吉城郡古川町田畑屋敷地引絵図 (写)

原本：明治初期 飛驒市蔵

明治5年（1872）頃の古川町の土地情報を記した絵図です。土地の使い方によって色分けされています。区画整理や道路建設が本格化する前に作成された図のため、古い段階の町の様子が分かります。例えば左下の増島城跡付近を見ると、曲輪跡が畑（緑色）、堀跡が水田（黄色）として読み取ることができます。金森氏が築いた城下町の構造を推測する上で有効な資料です。

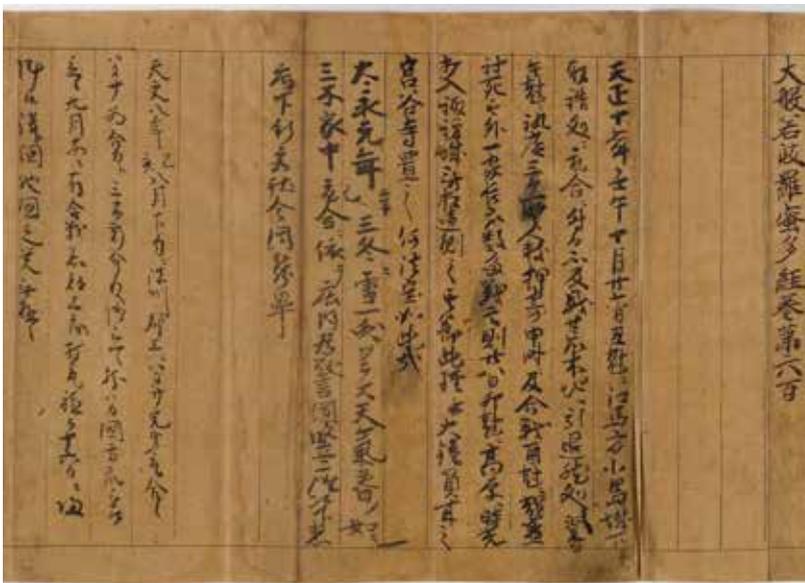
中世飛驒の宗教勢力と至宝

飛驒地方には中世創建・中興の寺院が多数存在します。中世の寺社は武士と繋がりを保ちながら地域の有力な勢力として存在していました。飛驒における寺院勢力として、中世前期は真言・天台といった密教勢力が主流で、やがて武家との関係から禅宗寺院が増加します。中世後期になると、浄土真宗が民衆に支持され隆盛します。

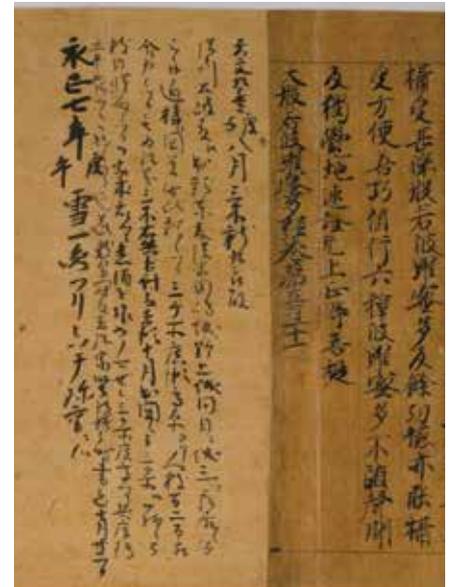
本展では、中世の宗教勢力と、武士の関わりに注目しました。寺院に残る大般若経は僧侶にとって重要な宝物であり、時に武士の戦利品として利用されました。また、古川町内の本光寺には飛驒地域最古級の方便法身像が残ります。これらの資料を通して中世飛驒の信仰の様子や勢力としての存在感をご覧ください。



国土地理院標準地図・陰影起伏図をもとに作成



第600巻奥書



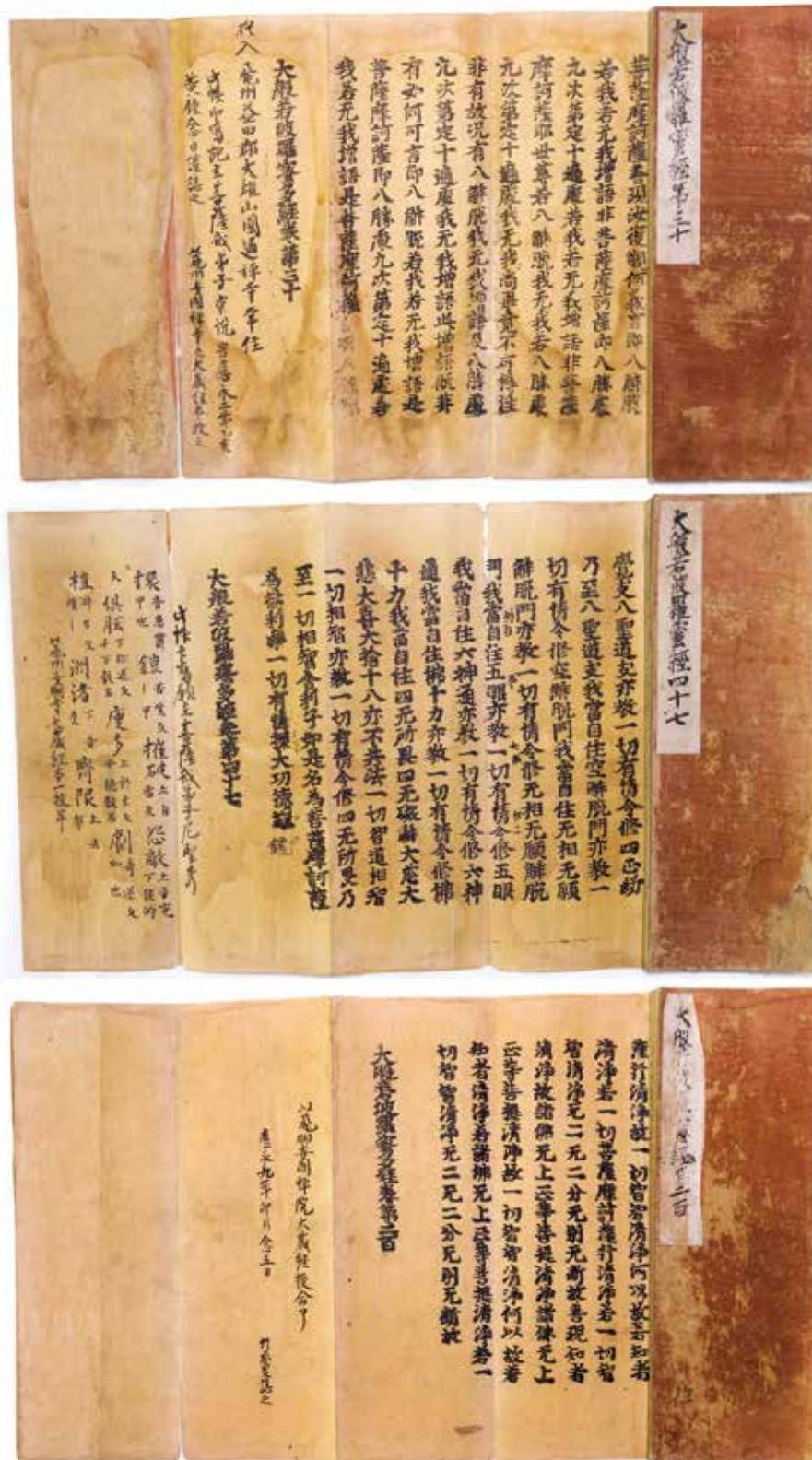
第511巻奥書

30 大般若経

岐阜県指定重要文化財

紙本墨書 大治5年～保元4年(1130～1159)頃 寿楽寺蔵

この大般若経は12世紀に書写され、河上庄かわかみのしょう(現在の高山市清見町周辺)の新宮社、高原郷に移りました。天正10年(1582)、八日町の戦い直後に高原郷に討ち入った小島時光こじまときみつによって、小島郷こじゅうこうじの宮谷寺に納められ、その末寺であったとされる寿楽寺(飛驒市古川町太江)に伝わっています。奥書には飛驒における複数の事件の記述が見えます。上記の八日町の戦いに関する経過の他、大永元年(1521)の記録には三木氏拠点として三仏寺城(現在の高山市三福寺町所在の山城)が見えます。さらに天文8・9年(1539・1540)の記録には三木氏的美濃出兵の記録が確認できます。飛驒国の中世史を語る上で欠かせない史料です。

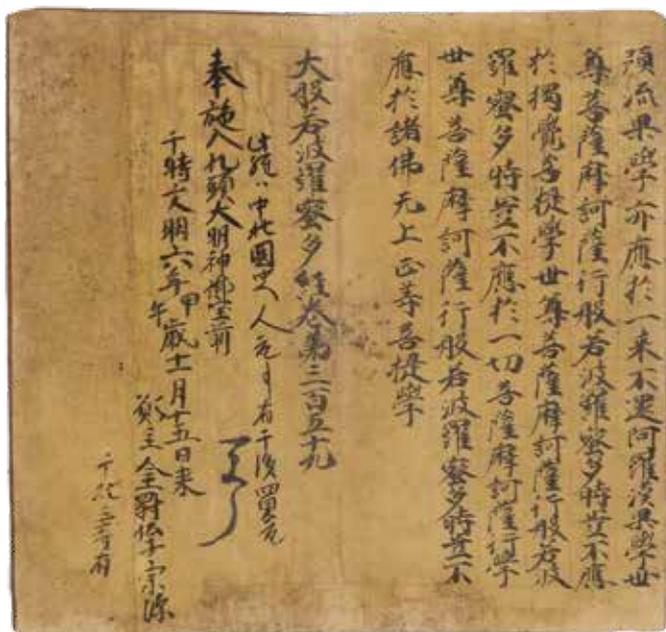


31 春日版大般若經

岐阜県指定重要文化財

紙本墨刷 応永7年(1400)頃 安国寺蔵

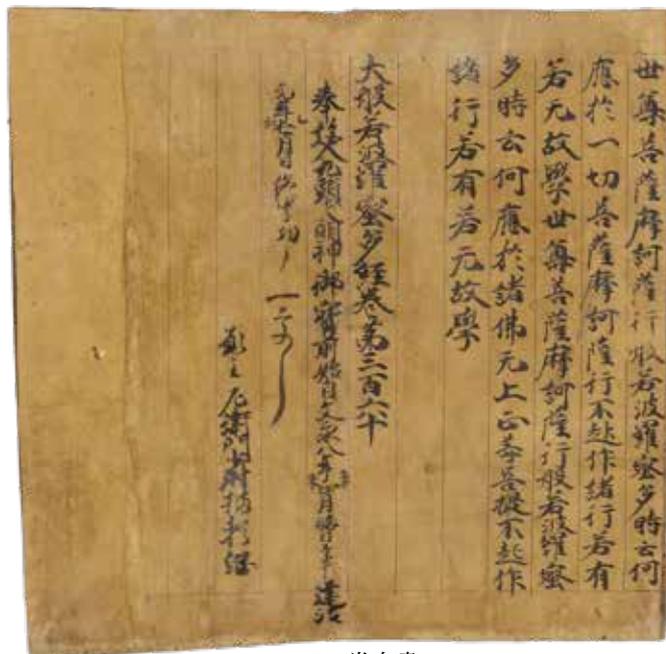
安国寺は高山市国府町に所在する臨済宗の古刹です。この大般若經は春日版と呼ばれるもので、大和の興福寺を中心に作成された木版の經典です。奥書によるとこの般若經は応永2年(1395)、益田郡に所在の円通寺(現在の禅昌寺)で施入し、その後安国寺所蔵の一切經と記載内容を照らし合わせたことが分かります。そのためか現在このお經は安国寺と禅昌寺に分かれて伝来しています。なお、この大般若經と照らし合せた安国寺の一切經は、その塔頭・南陽軒の本源一公都寺が中国の大普寧寺に渡り請来したものです。一切經が収められている經藏は飛騨地域で唯一国宝に指定されています。



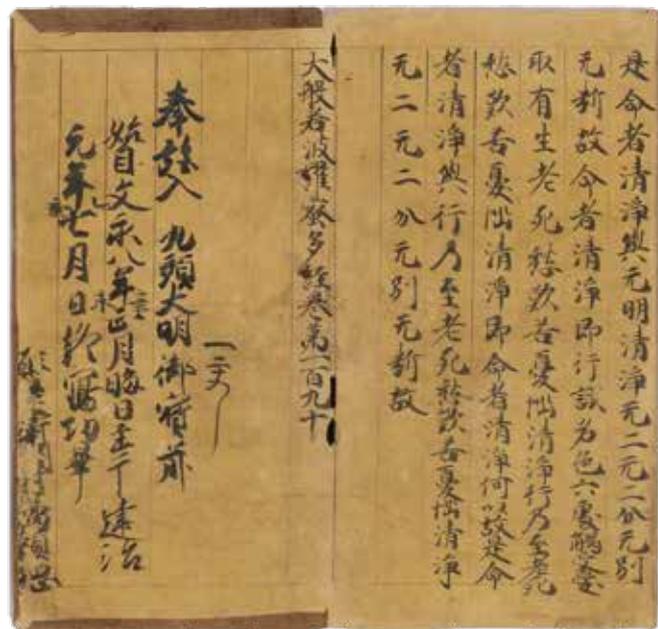
359卷奥書



147卷奥書



360卷奥書



190卷奥書



190卷表紙

32 大般若經

岐阜県指定重要文化財

紙本墨書 文永8年～建治元年 (1271～1275) 千光寺蔵

千光寺は高山市丹生川町に所在する真言宗の古刹です。寺伝によると仁徳天皇の時代、両面宿禰によって開創されたと伝わります。中世には三木氏の祈願所であり、関連する宝物が残ります。この大般若経もその一つとされ、郡上郡九頭大明神（現在の郡上市和良町）に所在したものを、三木自綱が天正元年（1573）の出兵で入手し、河尻利広を旦那として千光寺に寄進させたと伝わります。147巻奥書に寄進の大旦那として「河尻新之耐利広」の名が確認できます。



方便法身像
(本光寺蔵、岐阜県指定重要文化財)



33 蓮如裏書

岐阜県指定重要文化財

紙本墨書 文明17年(1485) 本光寺蔵

室町時代、本願寺は阿弥陀如来の絵像を各地の門徒集団に下げ渡しました。本光寺の像もその一つで、これはその裏書です。本願寺第8世・蓮如の書で、文明17年(1485)に美濃国郡上郡奈良谷の道場(現在の高山市清見町所在の楢谷寺)に下附されたものが、いつしか古川町の本光寺に伝わりました。飛驒に残る方便法身像の中で最古級ものです。現在は裏書の部分を切り落とし、それぞれが1幅の掛け軸として伝わっています。



34 瀬戸美濃焼・四耳壺

大威徳寺跡出土品 14世紀後半～15世紀前半 下呂市教育委員会蔵

大威徳寺跡は飛驒・美濃境に存在した中世山寺の遺跡です。この壺は、中心伽藍の南側に位置する石造物集積地において、2003～2006年度の調査で出土しました。出土時、内部の土砂に火葬後の骨が含まれていたため、蔵骨器であると考えられました。蓋として山茶碗が用いられています。本格的な蔵骨器を伴う中世墓として、飛驒地方で初めての発見でした。壺の年代から墓は14世紀後半～15世紀前半のものと考えられます。

史料釈文

1 姉小路基綱画像所載和歌

(白料紙) ふるさとにのこる心はこころにて
(赤料紙) みはなほひなのみをなげくかな

2 姉小路濟繼画像所載和歌

(青料紙) くもをわけにこりをいしてこころもや
(橙料紙) おなしはちすのつゆのつきかけ

8 姉小路基綱和歌短冊

寄鳥恋我が身にやにほの巢守のうきながら
つゝのよる辺もしらで朽なん 基綱

9 姉小路濟繼和歌短冊

萩 秋風に たへん物かは 萩のうへに
わりなき露の 契りありとも 濟繼

12 懸仏(裏面)

永仁七癸歲次己亥 二月十五日彼岸初日丁卯建日 天恩日角宿水
曜本尊凶面 形作始同十六日戊辰元宿木曜種子 書頭同十七日己
巳氏宿金曜擊奉 大旦那左兵衛尉藤原国家 勸進僧覺祐

13 鑿鉢(上辺の刻印銘)

維時文祿三甲午稔八月良日金籠子造 飛州吉城郡高原郷殿村殿秀
山瑞岸禪寺什物 現住喝山叟代

14 金籠子覚 瑞岸寺宛

一 八拾三匁 唐様鑿(鑿) 壹尺三寸一分
上はい巻本 同藤わ巻ッ

外ニ銘堀質 三拾八文
右之銀子髓ニ請取相済申候 以上
京三条大橋東式丁目
未八月十四日 金籠子(黒印)
飛州 瑞岸寺様

15 三木自綱書状 塩屋筑前守宛

河端かたより借錢百疋調被越候旨、委細令存知候、返辦之義、則
可申付候、可成其意候、
四月晦日(三木) 自綱(花押)
(奥捻封上書) 塩屋筑前守殿 自綱

16 三木自綱書状写 細江太郎左衛門宛

名字輔任之儀、忠節之筋目任有之、内々其理令存知候、然間、彌
奉公之可抽忠功之段、管(肝)要候也、謹言、
(三木自綱)(花押影)
天正式 霜月十四日
細江太郎左衛門とのへ

17 三木自綱跡職安堵判物写 細江牛宛

細江彌右衛門討死ニ付て彼跡職、則子牛ニ申付候、幼少之事ニ候間、
祖父太郎左衛門取立、牛成仁之上、無異儀相続仕、奉公肝要候也、
仍如件、
天正六 十二月廿九日(三木自綱)(花押影)
牛

18 三木直頼梵鐘銘(拓本部分)

飛州袈裟山千光寺 因禍亂堂塔諸伽藍悉 焰滅欽歎之余国主
三木直頼朝臣大和守

23 金森頼吉書状 林昌寺宛

為城着之嘉儀、渡辺外記迄御飛札殊一種送預被欣悦候、其許弥御
無異珍重事候、不備
金出雲守
十月十五日 頼吉(花押)
林昌寺 凡右

27 金森可重定書

一 諸やくめんきよせしむる事
一 いか物のうり物成共、みせてをき令売買事
一 おしかい、おしうりのやから在之へ、きゝ出次第双方
せいばいすへき事
右条々不可有相違所如件
天正十七 三月廿八日(黒印)

30 寿楽寺藏大般若經奥書

※六六卷の写真は本書未掲載
(六六卷) 大永元年辛巳三冬雪一円フラス、天氣ノ鉢者、十月月上旬
ノ如シ、暖成事春ノ末ノ如シ、彼國依念劇、寺家ヨリ堅座ヨリ下
悉下向シ、庄内誓固ノ為ニ新宮社ニ令閉籠畢、三木殿者三佛寺在
城候也
(五一二卷) 天正九季庚子八月三木新九郎殿、濃州土岐殿江出頭、
東美濃米田嶋城・野田城、同日二城三ッ落居候而被罷通、隣国覺
無比類候間、三ヶ所・廣瀬・高原ヨリ、人数百、二百宛合力候間、
其為禮義、三木右衛門尉殿直頼十月出国候而、三ヶ所江御越候而、
数日滞留候間、御家来衆へも悉酒を作りノマセ候、三ヶ所・廣・

33 本光寺藏蓮如裏書

本願寺釈蓮如(花押)
文明十七乙巳十一月廿八日
飛騨国白河善俊門徒
美濃国郡上郡奈良谷
願主 釈円実

※4・7・10の釈文は『古川町史史料編1』に所載されています。

主要参考文献

藤田伊人編「九六八」大日本地誌大系 斐太後風土記 雄山閣(富田礼彦一八七三)『斐太後風土記』
 大下永二〇二「明治前期の地籍図からみる武家拠点周辺の空間構造」『飛騨市歴史文化調査報告』第3集
 大下永二〇二「城郭調査における赤色立体地図の活用について」『飛騨市歴史文化調査報告』第3集
 岡村守彦一九七九『飛騨史考』中世編
 岡村利平編一九〇九『飛州志』住伊書店(長谷川忠高『飛州志』(享保年間))
 岡村利平校訂一九一四『飛騨叢書第三卷 飛騨遺業合府』住伊書店
 香川元太郎二〇一七『よみがえる日本の城』株式会社P・H・P研究所
 香川元太郎二〇二二『ワイド&パノラマ鳥瞰・復元イラスト 戦国の城』株式会社ワン・パブリッシング
 上町遺跡C地点発掘調査団一九九一『上町遺跡D地点発掘調査報告書』
 岐阜県一九七二『岐阜県史 史料編 古代・中世』
 岐阜県教育委員会一九六一・一九六三・一九六五・一九七五・一九九四『岐阜県指定文化財調査報告書』
 第四・六・八・一八・三十七巻
 岐阜県教育委員会二〇〇五『岐阜県中世城館跡総合調査報告書 第4集(飛騨地区・補遺)』
 岐阜県文化財保護センター二〇一一『三枝城跡』
 岐阜県文化財保護センター二〇一二『野内遺跡C地区』
 岐阜県文化財保護センター二〇一三『与島B地点遺跡・与島C地点遺跡』
 岐阜県文化財保護センター二〇一四『下切遺跡』
 岐阜県文化財保護センター二〇二二『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
 黒板勝美編二〇〇二『新訂増補国史大系第五四巻 公卿補任第二三篇 吉川弘文館』
 黒板勝美編二〇〇二『新訂増補国史大系第五五巻 公卿補任第二三篇 吉川弘文館』
 黒板勝美・国史大系編集会編二〇〇二『新訂増補国史大系第五九巻 尊皇分脈第一編』吉川弘文館
 下呂市教育委員会二〇〇七『岐阜県指定史跡 鳳慈尾山大威徳寺跡』
 下呂市教育委員会二〇一四『桜洞城跡発掘調査報告書』
 斎木一馬・林亮勝・橋本政宣編一九八二『寛永諸家系図伝第五』続群書類完成会
 財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター二〇〇五『本江遺跡II』
 財団法人岐阜県文化財保護センター一九九三『深沼遺跡』
 高柳光寿・岡山泰四・斎木一馬一九六五『新訂寛政重修諸家譜 第十二続群書類完成会』
 高山市教育委員会一九九九『高山の文化財』
 中井均・内堀信雄編二〇一九『東海の名城を歩く 岐阜編』吉川弘文館
 丹生川村教育委員会二〇〇二『尾崎城跡発掘調査報告書(第3次・第4次・第5次)』
 飛騨神岡まちづくり実行委員会二〇二二『天地を翔ける〜江馬氏城館跡のすべて』
 飛騨市二〇一〇『古川町歴史探訪』
 飛騨市二〇一五『飛騨古川 歴史をみつめて』
 飛騨市教育委員会二〇一〇『江馬氏城館跡VI』
 飛騨市教育委員会二〇一〇『増島城跡』
 飛騨市教育委員会二〇一三『上町遺跡向町地点』
 飛騨市教育委員会二〇一九『飛騨市内遺跡詳細分布調査報告』
 飛騨市教育委員会二〇二二『姉小路氏城館跡』
 飛騨市教育委員会二〇二三『上町遺跡8』
 藤澤長祐二〇〇八『中世瀬戸案の研究』高志書院
 古川町一九八二『古川町史 史料編一』
 古川町教育委員会一九九一『上町遺跡D地点発掘調査報告書』
 古川町史編集委員会二〇〇九『福全寺快存上人遺品展』『広報ひだ』二〇〇九年八月号
 宝月吉吾・岩沢隆彦監修一九七三『系図叢書 第五冊』名著出版
 三好清起二〇二二『姉小路氏関連遺跡で出土する中世土師器皿の編年試案』
 『中井均先生退職記念論集 城郭研究と考古学』サンライズ出版
 林昌守二〇一三『五峰山 林昌守史』

出展目録

<第2章> 発掘された飛騨の中世

番号	遺跡名	資料	所有者	
1	姉小路氏城館跡	古川城跡	土師器皿、瀬戸美濃焼皿・天目茶碗、白磁碗、金槌、小刀の柄	飛騨市
2	姉小路氏城館跡	小島城跡	土師器皿、瀬戸美濃焼天目茶碗	飛騨市
3	姉小路氏城館跡	野口城跡	土師器皿	飛騨市
4	姉小路氏城館跡	向小島城跡	瀬戸美濃焼皿・天目茶碗、青磁碗、小刀の柄	飛騨市
5	姉小路氏城館跡	小鷹利城跡	珠洲焼甕、青磁碗、白磁碗	飛騨市
6	岡前館跡		土師器皿、瀬戸美濃焼天目茶碗、瓦器火鉢	飛騨市
7	岡前遺跡		土師器皿、瀬戸美濃焼皿・天目茶碗、珠洲焼すり鉢	岐阜県文化財保護センター
8	上町遺跡		土師器皿、瀬戸美濃焼入子・すり鉢	飛騨市
9	太江遺跡		土師器皿	岐阜県文化財保護センター
10	増島城跡		瀬戸美濃焼天目茶碗	飛騨市
11	江馬氏城館跡	下館跡	土師器皿	飛騨市
12	尾崎城跡		土師器皿	高山市教育委員会
13	三枝城跡		土師器皿、瀬戸美濃焼皿・卸目付大皿、飛礫	岐阜県文化財保護センター
14	日焼遺跡		瀬戸美濃焼天目茶碗・卸目付大皿	岐阜県文化財保護センター
15	野内遺跡C地区		土師器皿、瀬戸美濃焼水注・柄付片口・卸目付大皿	岐阜県文化財保護センター
16	桜洞城跡		土師器皿、瀬戸美濃焼皿・天目茶碗、青磁盤・香炉・酒壺蓋、白磁杯、青花染付皿	下呂市教育委員会
17	下切遺跡		土師器皿、瀬戸美濃焼天目茶碗、山茶碗	岐阜県文化財保護センター

<第3章> 香川元太郎 城郭原画展(飛騨・美濃編)

番号	名称	城の所在地	製作年	所蔵	考証	番号	名称	城の所在地	製作年	所蔵	考証	
1	古川城	飛騨市	2020年	飛騨市	中井均・ 飛騨市教育委員会	16	稲葉山城落城	岐阜市	1995年	香川元太郎	香川元太郎	
2	小島城		2021年			17	岐阜城	岐阜市	1996年		香川元太郎	
3	小島城 当初図(写)		2018年			18	松尾山城	関ヶ原町	2011年		中井均	
4	野口城		2021年			19	大野城	福井県大野市	2021年		加藤理文	
5	向小島城		2021年			20	萩原諏訪城	下呂市	2021年		下呂市	下呂市教育委員会
6	小鷹利城 向氏段階		2021年			21	桜洞城	下呂市	2021年		下呂市	下呂市教育委員会
7	小鷹利城 三木氏段階		2021年			22	岐阜城 山上曲輪	岐阜市	2022年		岐阜県	中井均・岐阜市文化財保護課
8	高原諏訪城		2018年			23	松尾山城	関ヶ原町	2022年		岐阜県	中井均・関ヶ原町
9	傘松城		2020年			24	金山城	可見市	2015年		可見市	中井均
10	江馬氏館		1996年			25	金山城 中心部	可見市	2015年		可見市	中井均
11	松倉城	高山市	2013年	香川元太郎	26	加治田城	富加町	2016年	富加町	富加町教育委員会		
12	高山城	高山市	1996年		27	岩村城	恵那市	2022年	恵那市	三宅唯美		
13	高山城 本丸	高山市	2020年		28	明知城	恵那市	2020年	恵那市	三宅唯美・中井均		
14	高山城 本丸断面	高山市	1996年		29	大垣城	大垣市	2020年	大垣市	大垣市教育委員会		
15	高山陣屋	高山市	1992年		30	大垣城 天守断面	大垣市	2020年	大垣市	大垣市教育委員会		

<第4章> 姉小路氏と中世飛驒の至宝

番号	指定	名称	材質・技法等	員数	時代	所蔵者
1	飛驒市指定	姉小路基綱画像	絹本着色	1幅	江戸後期	個人
2	飛驒市指定	姉小路済継画像	絹本着色	1幅	江戸後期	個人
3		極書	紙本墨書	1枚	江戸後期	個人
4	飛驒市指定	若草山の記	紙本墨書	1冊	明応6年(1497)	個人
5	飛驒市指定	後撰集	紙本墨書	1冊	16世紀初め頃	個人
6	飛驒市指定	飛驒国司姉小路家譜	紙本墨書	1冊	天保4年(1833)頃	個人
7	飛驒市指定	足利義政詠着到百首和歌	紙本墨書	1巻	文明12年(1480)	個人
8	飛驒市指定	姉小路基綱和歌短冊	紙本墨書	1枚	15世紀末～16世紀初め頃	個人
9	飛驒市指定	姉小路済継和歌短冊	紙本墨書	1幅	15世紀末～16世紀初め頃	個人
10	国認定重要美術品	姉小路基綱消息	紙本墨書	1幅	15世紀末頃	個人
11	飛驒市指定	墨書土師器皿	江馬氏下館跡出土	4点	16世紀前半	飛驒市
12	岐阜県指定	懸仏	木製	1点	永仁7年(1299)	瑞岸寺(小萱薬師堂所在)
13	岐阜県指定	鑿鉢	銅製	1点	文禄3年(1594)	瑞岸寺
14		金籠子覚 瑞岸寺宛	紙本墨書	1幅	文禄4年(1595)	瑞岸寺
15		三木自綱書状 塩屋筑前守宛	紙本墨書	1幅	永禄～天正年間(16世紀後半)	飛驒高山まちの博物館
16		三木自綱書状写 細江太郎左衛門宛		1葉	原本：天正2年(1574)	飛驒高山まちの博物館
17		三木自綱跡職安堵判物写 細江牛宛		1葉	原本：天正6年(1578)	飛驒高山まちの博物館
18	原本：岐阜県指定	三木直頼梵鐘銘(拓本)		1幅	原本：天文15年(1546)	千光寺
19		古銭	尾崎城跡出土	182点	使用年代：15～16世紀	飛驒高山まちの博物館
20	高山市指定	金森長近画像	絹本着色	1幅	江戸時代	素玄寺
21	岐阜県指定	金森可重画像	絹本着色	1幅	江戸時代	林昌寺
22	飛驒市指定	金森頼岑遺墨「九歳」	紙本墨書	1幅	江戸時代	林昌寺
23	飛驒市指定	金森頼岑書状 林昌寺宛	紙本墨書	1幅	江戸時代	林昌寺
24	飛驒市指定	葵紋付革履	革製	2点	江戸時代	林昌寺
25	飛驒市指定	梅鉢紋付扇		1点	江戸時代	林昌寺
26	飛驒市指定	望遠鏡	紙製	1点	江戸時代	林昌寺
27		金森可重定書	紙本墨書	1巻	天正17年(1589)	飛驒市
28	飛驒市指定	笈(伝快存上人遺品)	木製	1点	江戸時代	誓願寺
29		飛驒国吉城郡古川町田畑屋敷地引絵図(写)		1枚	原本：明治初期	飛驒市
30	岐阜県指定	大般若経	紙本墨書	3冊	大治5年～保元4年(1130～1159)頃	寿楽寺
31	岐阜県指定	春日版大般若経	紙本墨刷	3冊	応永7年(1400)頃	安国寺
32	岐阜県指定	大般若経	白紙墨書	4冊	文永8年～建治元年(1271～1275)	千光寺
33	岐阜県指定	蓮如裏書	紙本墨書	1幅	文明17年(1485)	本光寺
34		瀬戸美濃焼・四耳壺	大威徳寺跡出土品	1点	14世紀後半～15世紀前半	下呂市教育委員会



令和5年度飛驒市美術館企画展 姉小路氏城館跡と飛驒の中世 展示品図録

発行日 令和5年10月21日
編集・発行 飛驒市教育委員会
印刷 オフィスばんぼり